

ツアー参加者氏名 古田 勝一

卒業年 1986 年 卒業学部 法学部

参加コース C 岩手県コース

「現地を訪問して思うこと」

私は、昨年東北応援ツアーの宮城県コースに参加させていただいたのですが、被災地においてとりわけ校友の方々が復興に向け頑張っておられる姿に深い感銘を受けました。そしてその余熱の冷めやらぬままに今年岩手県コースにエントリーし、運良く再び応援ツアーに参加させていただく機会をいただきました。

今回のツアーでは、集合場所の盛岡から遠野を経て三陸海岸の釜石市へ行き、三陸鉄道南リアス線の震災学習列車に乗車しました。そして車内では三陸鉄道の職員さんから車窓から見える被災地の震災当時の状況等について説明していただきました。

そのお話しの中で特に印象に残ったのは、同じ三陸海岸でも地区によって被害の程度が異なるということです。被害の少なかった地区というのは比較的高台にあったのですが、それは明治時代に津波の被害を受けた経験を生かした地区だということでした。その当時の村長さんが「津波はまたいつか必ず来る」ということで村全体を高台に集団移転させたことにより今回の津波の被害が小さくて済んだそうです。つまり、津波などの災害というのは百年単位にも及ぶぐらいの長期的な視点で対策を行わなければならないのだなあと感じた次第です。

その後は宿泊先の陸前高田市に着き、被災された校友の方々(4名)の体験談を聞かせていただきました。いずれも迫真の内容でしたが、とりわけ被災者でありながら公務員として救援・復興活動に奔走された校友のお話が印象的でした。

その校友の方は自宅が大きく被害を受けられたのですが、公務員という立場上私事よりも市民のことを優先せざるを得ず、震災以降役所に泊まり込んで救援・復興等の仕事に没頭されました。そのことでは家族よりも仕事を優先することに奥さんから相当の苦言があったそうですが、市民生活を優先せざるを得ない苦悩というものが伝わってきました。これは、公務員にとっては答えの出ない永遠の命題なのだなと感じました。今回の震災で最も苦勞されたうちの一人は、まぎれもなく被災された公務員であるということに改めて思いをいたしました。

その方は、復興の仕事の中で次第に健康が損なわれていくことに危機感を感じ昨年の末に退職されたということですが、自分の命を縮めてまで公務に専念せざるを得ないというのは本末転倒であると私も思います。ゆっくりと休養していただき、さらに充実した第二の人生を送られることを願ってやみません。

翌日は、世界遺産でもある中尊寺の金色堂などを見学させていただきました。地元平泉町職員の小野寺さん(校友)手書きのマップを片手に、同氏の教え子筋にあたるというガイドさんの面白くかつ丁寧な説明が聞いたことが印象的な思い出として残っております。

最後に、このような得難い機会を与えてくださいました岩手県校友会の校友の皆様及びお世話いただいた校友会事務局等の皆様方に深くお礼申し上げます。

また再び岩手県を訪れる日を今から楽しみにしております。